

# 事検味佐反動擁護する必死を革マル



82. 9. 24

No. 1153

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)  
(鉄電)二二五八・九・公衆電話(22)七二〇七

## 9/21朝日新聞「6.12事件」公判開かる

\*\*\*\*\*

九月二一日、千葉地裁において「六・一二事件」第一〇回公判が開かれ、吉岡執行委員・重見特別執行委員が証人として出廷し、弁護側立証が行われた。

公判は、動労千葉への憎しみをむき出しにする反動検事・佐々木が、完全に革マルを擁護し、革マルの立場にたつ尋問を執拗にくり返したが、吉岡・重見両氏の断固とした証言により、動労「本部」革マルの「六・一二事件」のデッチ上げ性、捜査・起訴の不当性が暴き出された。

\*\*\*\*\*

### 吉岡証人 動労「本部」革マルの組合民主主義否定・暴力支配を暴露

最初に出廷した吉岡証人は、動労「本部」を牛耳る革マルによる、一九七〇年水上における暴力事件にはじまり、一九七八年の津山全国大会、一九七九年の「四・一七津田沼襲撃」、一九八〇年の「四・一五津田沼襲撃」にいたる、組合民主主義の否定と暴力支配の実態を暴露すると同時に、「六・一二事件」当日、動労「本部」が山田亘君を勝手に囲いこみ、遅れて電車区にやってきた事実を証言した。

これに対して佐々木検事は、なんとか現場共謀だけは認めさせようと、執拗に誘導尋問を試みたものの、重見証人の事実に基づく証言の重みまゝに完全に粉砕された。

### 反動検事佐々木・動労「本部」革マル一体の攻撃を粉砕する

今回の公判の中で明確になったことは、反動検事・佐々木の文字通りの反動性である。

佐々木は公判に遅れて出廷したうえに、公判主任検事をおしのけて反対尋問を行い、あまつさえ証人の毅然たる態度にデッチ上げが暴露されるや焦り、「うるさい」と大声で怒鳴ったのである。

大口弁護士「異議あり、うるさいとは何だ。これは取調べ室ではない。法廷だ。検察官の態度は許せなからい」

裁判長「(被告が)何をいったんですか」

佐々木「裁判長、私の顔を見て笑ったんです」

裁判長「訴訟指揮は私がやります。他から口を出さないで下さい」

佐々木「……………」

佐々木は、動労千葉への憎悪を燃やし、何が何でも有罪にするために、革マルを擁護し、革マルの立場になりきって、襲いかかってきている。

今日、革マルに引廻された「本部」派は、法廷において、「もっと追いつめる」「有罪にしろ」と権力・検事を必死で応援する、労働者の感性を喪失した自分自身の姿に何ら疑問も感じなくなっているのだ。

われわれは、すでにバリエードの向う側、権力のフトコロに飛びこんだ「本部」革マルを許さない。

動労千葉は、動労から革マルの掃をもちとる決意である。

さらに「四・一五津田沼事件」についても、「病院で手当てを受けたのは動労千葉四人、『本部』八人で、その他に八人もケガをしている」といい、佐々木は「四・一五事件」について、事前に「本部」革マルから事情聴取したりえて、革マルの立場に立って動労千葉破壊に異常な執念でのぞんできたものの、吉岡証人のきっぱりとした証言により、佐々木の目論見は完全に粉砕された。

### 「六・一二事件」のデッチ上げを証言 重見証人

つづいて証言にたった重見証人は、「六・一二事件」当日、小倉・篠塚君が遅れて電車区に到着したことを証言し、「初めから現場にいた」という起訴状のデタラメ性を暴露した。

さらに「本部」革マルが津田沼に来ることを想定していなかったこと、斎藤(尚)が「証言」した「深見・吉岡(一)のうしろから重見が殴った」などというペテンを断固として否定した。